



友よ、また逢おう

ビリー・ザ・キッドの伝説

片岡義男

友よ、また逢おう

ビリー・ザ・キッドの伝説

片岡義男

友よ、また逢おう

昭和四十九年十一月三十日 初版発行
昭和五十五年一月二十日 再版発行

著 者 片岡義男

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三 郵便番号一〇二
振替東京三一九五二〇八電話(03)二六五一七一一

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 宮田製本所



舊丁・乱丁本はお取り替えます
0093-872137-0946(0)

友よ、また逢おう

ビリー・ザ・キッドの伝説

装
幀

平
野
甲
賀

彼は男前だと言えなくもなかった。若くて健康な肉体を持ち、気性はおだやかで人なつこく、なにしろ微笑がことのほか上出来だった——わずかこれだけのことが組み合わされてくるだけで、若い男は男前になるのだ。長い顔をしていて生まれつきはひどく色が白いのだが、太陽と風と厳しい気候とにさらされて、深く陽焼けしていた。左右のシンメトリの崩れた、ゆがんだ顔をしていて、このことが独特の魅力になっていたと言ってもさしつかえはないだろう。金髪に近い明かるいライト・ブラウンの髪を、いつも長くのばしていた。生まれつきすこしウェーブのかかった髪だった。グレイの澄んだ目をしていて、視線はしっかりとさだまっていた。上の前歯が大きくて、いささか反った歯であった。反っていなければまことにかたちの良い口なのだったから、この反った歯は、彼の顔の造作のなかの唯一の欠点であった。両手と両足が、とても小さかった。身長は五フィート八インチ。ほっそりとやせていて、ぜんたいのプロポーションは、申し分ない。小柄でありながら力は強く、両腕と肩の強さには、驚嘆すべきものがあつた。体調の最高のときのウェイトは一四〇ポンド。牧場で働いているときの彼は、どの牧童にも負けず土と汗にまみれて荒けずりであつたが、町にいるときにはなかなかの洒落者で、人に不快の念をあたえぬよう、気をくばっていた。多くの人々、なかんずく若き女性たちが、彼のことをハンサムなひとだと思っていた。ファンダンゴにおいてはたいへんな伊達男で、踊りの名手であつたという。

ウォルター・ノーブル・バーンズ『ビリー・ザ・キッドの伝説』より

その男は、階段の下で椅子にすわっていた。階段の下、つまり、二階へあがっていく階段の裏だ。木造の急ごしらえの二階建てのホテル『コスモポリタン』の二階へは、建物の外からもあがって行くことができる。建物の外側の壁から道路のほうに向かって板張りの歩道が突き出ている。建物のなかに入らず、その歩道から直接に二階のバルコニーへあがり、そこから七つある個室のどれにでも入って行ける。その階段の下に、男は椅子にすわってビールを飲んでいた。

春の終りを告げる風が吹いていた。何日も陽に照らされつづけて乾燥してしまった、でこぼこの道路から、風のたびに土ぼこりが舞いあがった。土とまじりあつてかわいた馬糞や、牛、ロバの糞などが、通行人の全身に容赦なくふりかかり、建物のなかへも入りこんだ。

その土ぼこりをなかなば避けるようにして階段の下で三角形のスペースのなかに入りこんだ男は、瀬戸物のコップからビールを飲みながら、通行人をながめていた。

脚が一本なくなっている椅子だった。脚がぬけているまえのほうを板張りの歩道から持ちあげ、うしろの二本の脚に体重をのせてバランスをとっていた。男の頭上には、ななめに階段が上にのぼっていた。その階段の裏の梁に、男は、自分の後頭部を軽くもたせかけていた。

ブラック・ジーンズをはいた長い両脚を、男は、まっすぐまえに投げ出していた。はいている頑丈そうなブーツは、もう完全にかたが崩れていた。だが、まだあと数年は、もちそうだった。ブラック・ジーンズも、力のかかるころやなにかほかのものにこすりつけることが多い部分、たとえば両ひざとか太腿の肉のよりあがった部分などは、色がとれてしまつて白くなっていた。かつてなに色だ

ったのか見当もつかない色のウールのシャツのうえに、ヴェストをつけ、バッファローの皮でつくった上衣を着ていた。顔のひげは剃ってあるのだが、髪はのぼしほうだいで、肩に長くかかっていた。黒い帽子をかぶっていた。つばが横にまっすぐのびていて、それがこの町のような銀の鉱山町でよく見かけるその男の顔に、險悪な雰囲気を与えていた。

自分の頭ほどの大きさにふくらんだバックスキンの袋を、男は三つ持っていた。左右の脚のひざのうえにひとつずつくりつけて重く垂らし、もうひとつは、ガン・ベルトのバックルにくくりつけて股間に垂らしていた。その三つの袋には、銀の鉱石が入っているはずだった。酒場で酒を飲むときには、この袋から現金のかわりに鉱石をつかみ出し、重さを天びん計りで計量し、支払いにあてゐるのだ。金や銀の鉱山町には、よくこんな男がいた。

ビールを飲むとき以外、男は口を開かなかった。薄い唇を一文字に閉じ、冷たい灰色の目で、明るい陽に照らされている町なみとその通行人たちを、男は、黙ってながめていた。

椅子にすわってじっとしつづけていたこの男が、あるとき、ささやかな不思議な行動に出た。その男がなぜいきなりそのようなことをしたのかは、その男自身にしかわからなかった。ひょっとしたら、その男にすら、わからなかったかもしれない。板張りの歩道のうえを、階段の下の自分に向かって歩いてくる通行人のなかから、ひとりの若い青年をえらんで、男は、その青年の足を自分の右脚で力まかせに蹴りとばしたのだ。

青年は、右足を蹴りとばされた。歩いて来てその男のすぐそばに右足をついてそこへ体重をのせきつた瞬間、男の重いブーツをはいた足で右足を蹴りとばされたのだ。体重をのせたとたんの彼の利き足は、横へ払われた。体のバランスを失ったその青年は、土ぼこりだらけの歩道のうえに倒れた。

男と青年は、おたがいに顔見知りでもなんでもなかった。町のなかをごく普通に歩いていたその青

年の足を蹴りとばして倒さなければならぬ正当な理由は、なにひとつなかった。なのに、なぜその男がそんなことをしたのか。それは、誰にもわからなかった。

青年は、立ちあがった。自分を蹴りとばした男の右脚が、ひっこめられていくのを、青年は見た。その右脚を追って、青年は椅子にすわっている男の前に出た。そして、すっと身を落とすように、しゃがんだ。両手をのばし、男がひっこめたばかりの右脚をつかみ、立ちあがりながらす早くうしろへ二、三步、体をひいた。

小さな椅子からひきずり落とされた男は、ビールの入った瀬戸物のコップをほうり出し、板張りの歩道のうえに尻もちをついた。男は、青年に両手でつかまれている右脚を引いた。青年を自分のほうに引き寄せておいたうえで、青年の腹を狙って左脚で遠慮なく蹴りとばした。青年は、男の右脚を離し、うしろへはねとばされた。ひっくりかえって尻をつきそうになるところを、両腕をさかんにふって体のバランスを回復しようとするところみながら、中腰になったまま、うしろへうしろへと走るようにあどさつた。そして、ホテルの前をこちらへ歩いて来た人の両脚に、ぶちあたった。

男は、階段の下に尻をついたまま、腰のガン・ベルトからレミントン・ニュー・モデル・アーミーを引きぬこうとしていた。男のその動作を、青年は、見のがさずにいた。ホテルの前を歩いて来た人の両脚に背中からぶつかった青年は、そこで歩道に尻と両手をついた。つくと同時に、はねかえるように立ちあがった。そして、その青年にぶつかられて立ちどまっている男の右の腰に吊つてあるホルスターに、す早くてきれいに反射する動作で左手をのばし、そのホルスターからピストルを引きぬいた。44口径の、スミス・アンド・ウェッスン・ニューモデルNo.3だった。

時間にして二秒かせいぜい三秒のあいだに、すべてのことがはじまって完結した。階段の下にいる男が、自分のレミントンをぬいて青年に向かってかまえるのと、自分がぶつかった人の腰からスミ

ス・アンド・ウェッスンを青年がぬくのと、ほぼ同時だった。男は、板張りの歩道のうえで上半身を起こし、レミントンの撃鉄に親指をかけた。

他人のスミス・アンド・ウェッスンを左手に握った青年は、左右いっぱいひらいていた両脚を、両ひざを折りつつ同時になかへすばめていった。この動作によって体の位置を低くしていきながら、自分のまえへ水平に突き出して下に向けた右の掌に、左手に握っているスミス・アンド・ウェッスンの撃鉄の突起を下からこすりつけつつ、左腕をそのまま階段の下の男に向かってまっすぐにのばしていった。

右の掌に下からこすりつけられたスミス・アンド・ウェッスンの撃鉄がフル・コックに起きたとき、銃口は階段の下の方の男の顔を正確に狙っていた。青年は、微笑していた。なにかとても楽しくて心はずむことがあるときにたいいていの人が見せるような、大きな微笑だった。白い反つ歯が陽をうけて光り、いまにも彼の唇から笑い声がもれてきそうだった。青年は、なんのためらいもなく、引金を引いた。人を狙ってピストルを射つのは、青年にとってはこれがはじめてだった。引金を引いて倒された撃鉄は、しかし、空の弾倉を叩いた。どういう理由でか、その弾倉には弾が入っていなかったのだ。

はじめて人を狙って射った一発が、空の弾倉を叩いただけに終わったことは、新鮮なショックだった。そのショックは、瞬間的に彼の全身にひろがった。引金を引いても弾の出なかった手ごたえのなさが、彼の心をつらぬいた。引金を引いても弾丸はかならずしも発射されるのだとはかぎらないのだと、ほぼ確実な死に直面しつつ瞬時に学び終えて、次の瞬間から、彼の両腕は素晴らしい反射運動をみせた。銃口は男の顔をびたりと狙ったまま、のばしきっていた左腕のひじを柔軟に折り曲げ、同時に二の腕をうしろに引き、まえに突き出したままの右手の掌の下にスミス・アンド・ウェッスンを引きもどした。引きもどすところでは撃鉄の突起を掌にこすりつけ、そのまま左腕をまっすぐにのばし、さきは

どとまったくおなじ動作で撃鉄を起こし、左腕をさらにのぼしていきながら、引金を引いた。

聞きなれた発射音がし、左腕ぜんたいが、発射の衝撃をうけとめた。いままさに自分のレミントンの引金を引こうとしていた男は、額のほぼ中央を射ぬかれた。まわりの肉を焼きながら弾丸は額に丸い穴をあけて男の頭のなかにとびこみ、脳髓をめちゃくちゃにひきちぎりつつ、後頭部の頭骨にあたった。内側にカーヴしているその頭骨に沿って弾は進路をかえ、脳天から外へとび出して来た。男の頭のでっぺんが内部から外に向かって割れ、かなりの量の脳みそを引きずって弾丸は外へとび出し、階段の木にめりこんだ。

すでに死んでしまっているその男は、弾丸を額にうけた衝撃で上半身をうしろに倒し、頭を歩道の板に打ちつけた。両足が歩道からうきあがり、舞うように両腕が動いた。そして、男の頭が歩道からはねあがってくるところへ、青年は、さきほどと完全におなじ動作のくりかえしで、もう一発、男の額のだいたいおなじ位置に、弾を射ちこんだ。

はねあがってきた男の頭は、再び歩道に叩きつけられた。脳髓や骨が噴きとんでそのぶん軽くなつたせいか、こんどはもっと高い位置にまで、バウンドしてはねかえった。そこへ、青年は、三発目を射った。男のえりもとに命中した。あおむけになつていたその男の体は、三発目をくらった衝撃で、腰からうえをうつぶせに反転させ、顔を歩道に叩きつけて動かなくなった。

通行人のうち数人が、銃声のほうをふりかえった。手にしていた射つたばかりのスミス・アンド・ウェッスンをす早く持主のホルスターにかえした青年は、横つとびに道路に降り、そのまま走って行った。青と白の格子じまの木綿のシャツにリヴァイ・ストラウスのブルジョーズを着たその青年は、新しいブーツをはいていた。上体をななめに倒しぎみにして走って行くとき、彼の金髪が陽をうけて光った。

歩道の、ほこりまみれの板のうえに男の血が影から陽なたに流れ出し、その臭いがあたりにただよいはじめるころ、青年の姿はもう見えなかった。

2

青年は自宅へ帰って来た。もう走ってはいなかった。なにごともなく日曜の礼拝から帰って来るときのように、彼は、あたりを見渡しながら、ごく普通に歩いていた。顔を右や左に向けるたびに、長い金髪が陽をうけて白く光った。自宅の正面にまわり、ポーチの階段をあがった。青年は、落着いて静かな様子をしていた。

ドアを手前に引いてあけ、彼は家のなかに入った。ドアには、鉄の蝶番もようづがいがとりつけられたばかりだった。以前は、バッファローの皮を長方形に切ったものを三枚かさねて釘で打ちつけ、蝶番の代用に使っていた。バッファローの皮と鉄とは、ドアをあげるときの手ごたえがまるでちがった。バッファローの皮のほうが、ドアは軽くひらくように彼には思えた。

家のなかに入ると、バッファローの肉が燃えるにおいがした。殺したバッファローの体を骨ごとこまかく切りぎざみ、干して燃料に使っている。それが燃えるときのおいだ。

正面のドアを入ると、まっすぐに廊下があり、その廊下は、家の裏につながっていた。彼の歩幅で二〇歩ほどで、家の裏に出た。廊下をはさんで左が両親の寝室だ。右側の部屋には大きな暖炉があり、食堂や作業部屋をかねていた。彼の寝台は、この部屋にあった。その部屋に入った彼は、自分の寝台の下から、ピストルを一丁、とり出した。さきほど射ったのとおなじ、スミス・アンド・ウェッスンだった。

このふたつの部屋をこえてさらに奥へ行くと、台所だった。台所は横に長く、大工仕事や洗濯、染めものなどのできるスペースが左側にあり、右側が調理の場所だった。母親は、そこでビスケットを焼いていた。

「今日は早いね、ピリー」と、ふりかえらずに、母親が言った。「ちょうどいいわ。熱いビスケットが食べられるから」

「明日は早く帰らない」

「おそくなるのね」

「明日はもう家にいない」

母親は、手をとめてふりかえった。彼によく似た顔をしていた。色の白い細い顔だ。彼よりもさらに目立って反った歯だった。だから、唇を閉じると、普通にしている、なにか微笑に崩れる寸前のような表情ができた。口のあたりで顔ぜんたいがわずかにゆがんでいて、いつも微笑しているような表情はさらに強調されていた。

目が、表情ぜんたいをもういちど補足していた。普通、人の目は横長なのだが、この母親の目は、たて長に見えた。大きな丸い目で、その目がすこし出ていた。だから、いそいで目をしばたいても、目ぶたはゆっくりと上下する。そのゆっくりさが、微笑する寸前のような表情を彼女の顔につくった。彼女は、目をしばたいた。どうしたの？ と、その目が問いかけていた。

その問いかけには答えずに、彼は、右手に持っていたスミス・アンド・ウェッスンを、台所のテーブルのうえに置いた。たてにふたつに割った丸太をつなぎ合わせた頑丈なテーブルのうえに、そのピストルは、小さいけれども重みのある音と共に、横たわった。その音の重さに、母親は、ただならぬいなきとかを悟った。

この子も、ついに今日、家を出て行ってしまうのだ。と、母親は、観念した。いちおうの覚悟だけは、とつくにできていた。だが、いざ決定的な瞬間が我が子に乗りうつって目の前に立つと、あらはじめできていた覚悟とはずいぶんちがった気持ちになるのだった。

テーブルのうえに置かれたビストルの重い音が、何度も彼女の頭のなかをかけめぐった。体のなかにあるものいっさいをその音が追いついていくようだった。三年まえに、この青年の兄が、家を出てしまった。そのときには、彼女は、こんな不思議な気分にはならなかった。兄は、家を出る決心をためると、ある夜、両親と弟の三人を居間に集めた。自分が家を出て行く理由を、興奮しながらも理路整然と語った。このような西部の地にいても苦勞が多いだけであること、西部の開発に関するすべては東部の資本に握られていること、などを兄は語り、自分は東部へ行ってその資本の側に加わるのだ、と宣言した。うしろから尻を蹴りとばされて顔を泥のなかに突っこむのはまっぴらごめんだ、と兄は言っていた。家を出る決心をする以前から言っていたことであり、兄にふさわしい考え方だと母親の彼女は思っていた。

兄が家を出ることに關しては、すべて彼女は納得がいていた。だから、たいして心配はしていなかった。だが、この弟のビリーは、母親自身にもうまく説明がつかない。いつかは家を出て行くにちがいない、ということだけは、よくわかつていた。だから、いつそのときが来てもいいように、ブーツだけはびったりと足にあったのを人に頼んでサンタフェから買ってきてもらい、ビリーにはかせていた。

町でおそらく人を殺したので、とりあえず大急ぎで逃げるといふことなのだろう。しかし、兄のようにいきり立ってはいず、急いでもいいない。ふだんでもなにを考えているのかよくわからない息子だった。兄に關しては、その行動も考え方もきれいに説明がついてしまう。弟の場合は、いっさいの

説明が不可能だったので、母親には、弟のほうがかわかった。こわいから心配も起こってくる。そして、その心配は無限にひろがった。東部へ出て行った兄の将来は、だいたい見当がつく。弟がこれからどうなっていくか、見当もつかない。

だから、こわくて心配であると同時に、彼女は、あきらめてもいた。我が子だけでも、とうてい自分の手にとどかないところにビリーはいる。手がとどかなければあきらめるよりほかはない。そのあきらめには、自分の健康に関する絶望もかさなっていた。母親は肺を病んでいた。調子がよくないときには、高熱が出て全身からいっさいの力がぬけてしまいうらしく、ベッドに寝たまま何日も寝がえりさえ打たずにじっとしていた。肺のためにすこしでもいい気候を求めてここへ四年まえに引越して来た。だが、転地で症状が好転する段階をすでに彼女の体はとおりこしていた。

間もなく確実に自分は死ぬ、という覚悟ができてしまうと、わからないながらもビリーを急に身近に引き寄せることができたような思いが、母親にはした。兄のことはなぜか頭になくなり、自分にはこのビリーひとりしか子供がいらないのだと思ってしまうに気づくことが、しばしばあった。

「急いで準備しなくては」

と、母親は言った。家を出て行くのね、と声に出して訊きたいのだ。だが、現実の声となって彼女の口から出たのは、出て行くも行かぬもない、それをこえたさきのことに関してだった。彼女は、焼けたビスケットをひっくりかえすスキレットを台のうえに置いた。

「ズボンはきかえなさい。下着もとりかえて」

母親は、エプロンで両手をぬぐいながら、暖炉のある部屋に急いだ。壁いちめんにつくりつけた、大小さまざまな空間を持たせた棚が、衣裳ダンスの代用だった。その棚から、彼女は、息子のための

ズボンと下着、そしてシャツや上衣などを取り出して、彼のベッドのうえに置いた。

「ズボンは、これ。こっちのほうが、生地が厚いから」

草の実を煮つめてとった染料で濃い紫色に染めた、ホームスパンのウールのズボンだった。やはりウールの、足首まである下着のうえに、ビリーはそのズボンをはいた。すこし長かったが、裾はブーツのなかに入れるのだから、長めのほうがいい。厚い靴下をはきなおし、両足をブーツに突っこんだ。グレイのフランネルのシャツに、へちまえりのバックスキンのヴェスト。そのうえにもう一枚シャツを着て、それから上衣だった。養父が着ていた黒いウールのスーツの上衣で、袖丈を彼に合うようにつめたものだ。丈は長いのだが、コートのように腰をつつみ、快適だった。

予備の着がえを手早くそろえた。水筒に水をくみ、干したビーフを油紙につつみ、焼いたばかりのビスケットを干パンにそえてべつの紙にくるんだ。闊葉樹を焼いて灰にし、その灰を水に溶いてこしたアルカリ液を羊の脂肪にまぜてつくった石けんが二個。木綿の布きれに、ひとつずつくるんであった。刃渡り九インチのナイフ。箱に入ったマツチ。

「これが熱さまし。こっちが腹痛とか下痢の薬。いいわね」

うなずいたビリーは、母親がそれを毛布にくるみこもうとするのをさえぎって、自分で器用に丸く巻き、皮ひもで三個所、ゆわえた。

バッファローの皮でつくったポンチョを、母親は持つて来てくれた。中央に穴のあいている円形のポンチョで、雨のときにはこの穴に首をとおしてかぶる。帽子もついていた。このポンチョも、小さく折りたたみ、荷物のなかにくるんだ。

ビリーは、自分のベッドの下から、弾丸の入った木箱をとり出して来た。ふたをあけた。44口径のピストルに使用できる、二一八グレイン（一〇グラム足らず）のセンター・ファイア弾丸が、箱いっ

ばいに入っていた。町の酒場で男たちを相手におこなうスリー・カード・モンテのカード・ゲームで勝った現金で、彼は弾丸を買っては、自分のピストルで射つ練習をしていた。

長さが一インチに満たないそのセミ・スモークレスの弾丸をひとつかみ左手にとり、ビリーは台所に引きかえした。テーブルのうえに置いたままのスマス・アンド・ウェッスンを右手に握り、ハインチの銃身を下に倒した。弾倉のところで銃身はふたつに折れ、弾倉にのこっている空の薬莖や、発射されないままの弾丸は、銃身が折れることを利用したオートマティック・エジェクターによって一度に六発そろって、弾倉のうしろに突き出されてくるしかけだ。

空の薬莖と弾丸とを彼はテーブルのうえにふり落とし、あらたに弾をこめ銃身をもとにもどした。そして、裏口のドアの取っ手に狙いをつけてみた。鉄の部分は濃いブルーに仕上げ、簡素な木製のグリップをつけた、スマス・アンド・ウェッスンのシングル・アクション・アメリカンというピストルだった。

満足したビリーは、それを腹のまえでズボンのベルトにさしこんだ。ビリーのガン・ベルトとピストルは、馬といっしょに兄が黙って持つて行ってしまった。だから、いまのビリーには、自分のガン・ベルトも馬もなかった。部屋に引きかえし、皮の袋に弾丸をうつした。三重にした油紙を二枚のバッファローの皮にはさみこんでぬいあげた防水袋だった。

軽い旅じたくは、たちどころにととのった。これ以上に持ち物をふやしても、それは無駄というものだった。この町を一步出れば、南西部ニューメキシコの荒地のなかだった。いづどこでどのような目にあうか、見当はいっさいつかない。あらかじめプログラムを組むこともできない。単純な餓え死にをするかもしれないし、つまらない殺され方をするかもしれない。水や食べものがわるければ腸チフスになるし、なにごとかで小さなすり傷を負っても破傷風で死ぬ可能性はとても大きい。豚や馬